皇国の興廃　この一戦にあり

完勝を義務付けられた戦い

明治 38 年（1905 年）5 月 27、28 日の二日間にわたって日本海軍連合艦隊とロシア帝国第二太平洋艦隊（バルチック艦隊）との間に対馬から鬱陵島海域の日本海に於いて激戦が交わされた。後に日本海海戦と名付けられた海上戦闘である。

この頃中国大陸に於いて日本陸軍とロシア陸軍の激戦が繰り広げられており、シベリア鉄道により陸路補給の出来るロシア軍と違って、海上交通により日本本土より補給をしなければならない日本軍にとって、制海権の確保は最重要課題であり、バルチック艦隊の有力艦艇を例え数隻でも打ち漏らしたら、大陸への海上交通が脅かされる危機的状況にあった。
まさにサッカーW杯の予選に例えれば、単に勝ち点を奪うだけではだめで、6 点差とか 8 点差とかの大量得点を得なければならない戦闘であった。

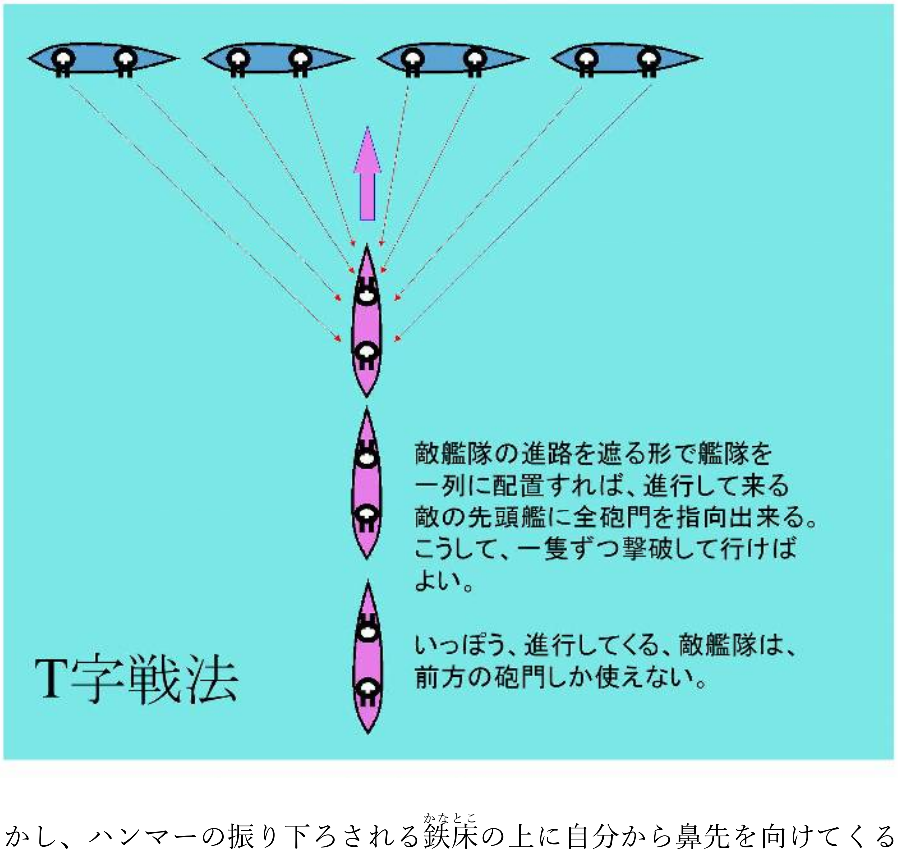
本国を出帆したバルチック艦隊は一旦ウラジオストック軍港に寄港して艦隊整備をするものと予想はできたが、そのルートが分からない。
そのため日本海軍は遠くマレーまで艦船を派遣し、台湾から日本本土の間には濃密な哨戒網を張っていたが、ようとしてその姿を掴めなかった。
姿の見えないバルチック艦隊に、既に太平洋側を回ったものと予想して、津軽海峡に向けて艦隊を移動させる予定であった。
まさに艦隊移動予定日の 5 月 27 日早朝 4 時ごろ哨戒中の信濃丸からバルチック艦隊発見の報を受けた。
連合艦隊旗艦三笠では、「敵艦隊見ユトノ警報ニ接シ聯合艦隊ハ直チニ出動、コレヲ撃滅セントス」の電報を作成し、更にこれに「本日天氣晴朗ナレドモ浪高シ」と付け加えて大本営に送信した。この電文を起草したのは秋山真之参謀であったと伝えられる。
この後半部分に秋山参謀の悲壮な決意が感じられる。

もっと早い時点で、バルチック艦隊を捕捉できていれば、本体同士の会戦前に駆逐艦などの水雷戦隊により、夜戦を仕掛け敵を漸減させることもできたであろうが、発見が遅れたためにそれもままならない。更に後の駆逐艦より遥かに小型の当時の駆逐艦では、航洋性が悪く波浪が高い海上では有効な戦力にならない。
従って大型艦同士の主砲の打ち合いで勝負が着くことになる。
この時、最大威力を持つ 12 インチ(30.5 センチ)砲を搭載した艦は、連合艦隊 4 隻、バルチ

ック艦隊８隻！
後の人は、この海戦が世界海戦史上でも稀な日本側のパーフェクト勝利に終わったことを知っており、評論家の中には連合艦隊はバルチック艦隊に対して戦力的に圧倒的に優位であったと評する人もいるが、この時の秋山参謀にはそんな楽観的予想を持つことはできなかったろう。― 後に大艦巨砲主義という思想が支配するように、艦隊決戦は主砲の優位さが全てなのだ！

T 字（丁字）戦法

日本海海戦は連合艦隊の T 字（丁字）戦法により勝利したと伝えられる。
T 字（丁字）戦法とは、単縦陣で向かってくる敵艦隊の進路を横切るように単縦陣で艦隊をちょうどアルファベットの T の形に配置すれば、味方艦隊は全主砲を敵の先頭艦に集中することが出来、向かってくる敵艦を順繰りに撃破できると言う戦法であり、小学生でも理解できる理屈である。



しかし、ハンマーの振り下ろされる鉄床の上に自分から鼻先を向けてくる程、敵もバカではない。
日本海海戦でも連合艦隊が敵前 150° ターンにより、T 字戦法に持ち込んだとされている

が、T 字を構成できたのは最初のわずかな時間であり、大部分は艦隊を並行して打ち合う同航戦であった。
東郷平八郎提督の決断した敵前大回頭は、敵艦隊に逃走する隙を与えないよう、敵の鼻先を抑えただけと考えられる。

海戦史において T 字戦法が成功した例としては、1894 年の日本海軍と清国北洋水師が激突した黄海海戦が挙げられる。
黒船が来航した 1850 年頃からその後 50 年くらいは、世界中で兵器の進歩が著しく進んだ時代であった。
最新型の兵器でも 10 年経つと旧式化する時代であった。
艦船の世界でも装甲を張巡らした装甲艦が造られ、一時大砲の威力より装甲の防御力が勝る時代があった。
南北戦争中の 1862 年 3 月 9 日にハンプトンローズで南軍の装甲艦バージニア（メリマック）と北軍の装甲艦モニターが交戦するが、互いに相手の装甲を打ち抜けず、痛み分けに終わっている。
1866 年 7 月 20 日のリッサ海戦において、装甲艦同士の戦闘では砲戦より体当たり（衝角戦）が有力な攻撃手段であると認識されるようになる。
清国北洋水師の誇る東洋一の大型軍艦「定遠」「鎮遠」は衝角戦を意識して設計された軍艦であった。そのため攻撃力は前方重視であり、主砲である 30 センチ砲は前方には 4 門指向できるが、側方には 2 門しか指向できなかった。
従って、衝角戦指向の旗艦を頂く清国海軍は横一列に広がって敵に向かう戦闘隊形を採ることになる。
一方小口径速射砲を多数舷側に配置した日本海軍は、横腹を敵に向け一列に並ぶ単縦陣を採ることになる。
この横隊の清国北洋水師と縦隊の日本海軍が 1894 年 9 月 17 日に黄海において会戦することになる。
当初 T 字戦法という概念は無かったが、戦闘が始まると清国北洋水師の横隊と日本海軍の縦隊が図らずも T 字を形造ることになり、日本海軍の遊撃隊の「吉野」「高千穂」「秋津洲」「浪速」は、横隊の端にいた「楊威」「超勇」に猛烈な砲撃を加え、たちまち戦闘不能に追い込んでいる。
実戦において T 字戦法が完成した唯一の例は第二次世界大戦末期の 1944 年 10 月 25 日のスリガオ海峡海戦であろう。
ただし、T 字を完成させたのはアメリカ海軍であり、粉砕されたのは日本海軍であった。
日本艦隊はアメリカ海軍の用意した金床の上に身を投げ出して行き壊滅している。
この T 字戦法により粉砕される以前にアメリカ海軍はスリガオ海峡に魚雷艇や駆逐艦を幾重にも配置しており日本軍を漸減するのに成功している。

まさに秋山真之が４０年前に構想した戦法をアメリカ海軍が実戦において完成したと言える。

日本海海戦がその後に残したもの

明治維新以来日本が最も恐れたものはロシアの南進政策であった。陸軍も海軍もロシアを仮想的とすることで一致していた。
ところが、日露戦争で世界第二位の海軍力を誇っていたロシア海軍を壊滅させ（帝政ロシア-ソ連時代を通して、第二次世界大戦後まで、とうとう有力な海軍力を持つことは出来なかった）、世界第一位の海軍力を持つ英国とは日英同盟により友好関係にあったため、日本近海、大陸や台湾への海上権は完全に掌握され、最早強力な海軍力を持つ必要は無くなった。
しかし、戦功があった海軍がそのままリストラされる訳がない。海軍の発言力は益々強くなり、多大な国家予算を占めることになる。
多額の軍事予算を獲得し軍備を拡張するためには、軍備計画が必要となる。軍備計画の前提として、どの国の攻撃から日本を守るか？という仮想敵が必要となる。日本海軍が注目したのは伸張著しいアメリカ海軍であった。日本がアメリカを仮想敵とすればアメリカも日本を仮想敵とする。こうして日米の間では（英国も含めて）軍備拡張計画が進み緊張が進んでいく。
国力の限られた日本で陸軍はソ連を仮想敵とし、海軍はアメリカを仮想敵とする、不統一が進むことになった。

日本海軍のアメリカ海軍迎撃計画は漸減要撃作戦として策定される。
これは、日露戦争におけるバルチック艦隊迎撃をそっくりマネたものあった。
ただし、日本海海戦で事前にバルチック艦隊を発見捕捉できなかった反省に基づき、哨戒網の充実を重視した。このため、日本本土を遥かに離れた太平洋上で来寇する米艦隊を捕捉するため、米海軍基地の近くまで隠密裏に接近できるよう航続力の大きな潜水艦を多数建造した。ただし、潜水艦では哨戒能力が弱いため、高空から哨戒できるように世界でも類のない航空機搭載潜水艦を導入している。
こうして、日本本土に接近する敵艦隊を少しずつ減殺するため、巡洋艦を旗艦とする水雷戦部隊を作り、夜戦により魚雷攻撃を計画した。このため、夜戦訓練を重視し、高性能な魚雷の開発にも努めた。
第一次世界大戦で獲得した南洋の島嶼部を基地として、大型飛行艇や陸上攻撃機を配置し、雷撃により更に漸減させ、最後は戦艦同士の砲激戦により勝敗を決する計画であった。

日本海軍が装備を急いだ空母もロングレンジから敵艦隊を攻撃し、漸減させるための一つの手段であった。
日本海軍の全ての艦艇は、この漸減要撃作戦に基づいて計画・設計・建造されたものであった。
しかし、実戦では事前に計画した漸減要撃作戦の様には成らず、漸減邀撃専用に建造した艦艇は運用の柔軟性を欠く物となってしまい、その後の作戦も合理性を欠くものとなってしまった。